

knowledgeの可算性についての一考察

——コーパスデータを基に

日 木 満

1 問題の背景

英語の名詞の可算性や冠詞の判断は多くの日本人英語学習者にとって母国語話者のような習得が難しい文法事項の1つとよく言われる。中でも一般に抽象名詞と呼ばれる名詞の場合、特に難しいように思われる。なぜ、抽象名詞が難しいのか考えてみると、それはどうも抽象名詞の中には、その名詞を可算形で使った場合と不可算形で使った場合の意味やニュアンスの差異を実感できない場合が多いからではないかと推測できる。ネイティブスピーカーにaをつけた場合とつけない場合の意味・ニュアンスの差を聞いても、明解な返事が返ってこない場合もあるし、返ってきて、かなり個人差がある場合もあってどれを信じていいかこまることしばしばある (Hiki 1996)。実際、可算形でも不可算形でもどちらでも良い場合もあるようだが、そこでの問題はそれが、どのような名詞が、どのような環境で、使われた場合なのかがよくわからないため、自信をもってどちらでもと良しと判断できない。それに、やはり大部分の場合は、可算形、あるいは不可算形、でなければ不適切となる場合なわけで、どちらかを選択しなければならない。そういう時に可算形でなければならないところで不可算形を使い、不可算形でなければならないところで可算形を使い、その苦い経験を基に逆をいってみても期待通りの結果にならず… とう連鎖経験が頭から離れず、結局、名詞の可算性や冠詞の判断は当てづっぱの域を脱しないている。

この名詞の可算性や冠詞の判断の問題は、特に英語を書くときには、避けて通ることのできない問題であり、可算形で使った場合と不可算形で使った場合に意味の差異が認識しにくい名詞の場合に、その使い分けに役立つ手がかりはないものか、という個人的ニーズが本研究の背景にある。

冠詞に関する先行研究は多数あるが、筆者の知る限り、上記の問題に明解な答を出しているものはない。そもそも、可算形と不可算形の使い分けを、解決すべき問題として取り上げているもの自体が少ないように思われる。そんな中で、Quirk, Greenbaum, Leech, & Svartvik (1985, p.287) は、通常は不可算の名詞に不定冠詞の a が例外的に使われる例として次の3文を挙げ、興味深い考察をしている。

Mavis had a good education.

My son suffers from a strange dislike of mathematics. <ironic>

She played the oboe with (a) remarkable sensitivity.

彼等は上例のような場合どのような条件下で不定冠詞が使われるのかはまだ明らかでないながらも、条件の中には次の2点が含まれるようだと述べている。

- (i) the noun refers to a quality or other abstraction which is attributed to a person ;
- (ii) the noun is premodified and/or postmodified ; and, generally speaking, the greater the amount of modification, the greater the acceptability of *a/an*.

つまり、問題の名詞がある個人に帰属する性質や抽象概念に言及しているということ。および、問題の名詞が前置修飾か後置修飾（もしくは両方）されていること。しかし、修飾句の存在は絶対的な要因ではなく、一般的に修飾の量が多ければ多いほど、*a* 使用についての容認度が高くなる関係にある、との考察である。¹ 前置修飾および後置修飾の *a* との関連性については Collins COBUILD English Grammar (1990, p.55) と Berry (1993, pp20-21) も同様の考察をしている。しかし、Quirk, et. al. が指摘しているように、抽象名詞が前置修飾や後置修飾されている環境で *a* が使われうることまではわかっている、その環境のなかでも必ず *a* が使われるわけではなく、どういう時に *a* が使われて、どういうときに使われないのか、はまだわかっていない。

可算形と不可算形の使い分け——しかも可算形と不可算形とで意味の差異が認識しにくい名詞での使い分け——は研究テーマとして本研究の範囲をはるかに超える。そこで、本研究では、その大きな研究テーマに向けての第1歩として、*knowledge* という名詞に的を絞り、コーパスデータを基に、実際にネイティブスピーカーはどのような環境で *knowledge* に *a* を使っているのかを検証してみたい。

2 データ

Los Angeles Times の1990年7月～12月分の記事から *knowledge* の用例を検索し (1583例)、その中から単数フォームか不可算フォームかが明確に判定できる用例616例を抽出した。² その際、単数フォームの基準は *knowledge* に *a* (*an*) が付いているものとし、不可算の基準は *knowledge* に *a* 以外の限定詞 (例 : *the* ; *this* ; *my* ; *-s*等) や複数語尾の *-s* が付いていないものとした。³ ただし、複数語尾の *-s* の付いている例は1例もなかった。なお、データ分析の過程で米語のネイティブインフォーマント2名が非文法的と判断した用例が1例あり、その1例は分析の対象から除外した。その結果、本研究の最終的な分析対象データは615例となった。⁴ 以下、データの全体とはこの615例を指すこととする。なお、以降は単数フォームを不定冠詞の *a* があるという意味で [+ *a*] と表記し、不可算フォームを [- *a*] と表記する。

3 データの分析と考察

3.1 不可算フォームと単数フォームの割合

全615用例中、不可算フォーム ([- *a*]) が537例 (87.3%) であるのに対し、単数フォーム ([+ *a*]) は78例 (12.7%) で、割的には不可算フォームが圧倒的に多かった。このことは、*knowledge* という名詞がやはり一般的には不可算名詞扱いされていることを確認する一方で、同時に単数扱いする場合も今回のデータ中に1割強は存在することを示す。

3.2 前置修飾とaの共起関係

全615用例中、前置修飾付きの knowledge は268例 (43.6%)、前置修飾無しは347例 (56.4%) と、割合的には前置修飾の付かない方が若干多かった。前置修飾の有無と a の有無の関係は表 1 のようであった。

表 1 knowledge における前置修飾と a の共起関係

	[+前置修飾]	[-前置修飾]	計
[+ a]	52	26	78
[- a]	216	321	537
計	268	347	615

前置修飾と a の関係をカイ 2 乗検定により統計的に見てみると、有意な関係がみられた ($\chi^2 (1, N = 615) = 19.37, p < .001$)。この結果は knowledge に a をつけるか否かの問題と前置修飾の有無になんらかの関連がある可能性を示唆するものだが、表 1 の結果は同時に、knowledge が前置修飾されている場合でも、実際に a が使われていた頻度 (n=52) は、a が使われなかった頻度 (n=216) の 1/4 にすぎないことも示している。つまり、前置修飾は a の使用と関連はしているかもしれないが、実際のところ、前置修飾されていても a を使わないことの方がはるかに多いということがわかる。

3.3 後置修飾と a の共起関係

後置修飾付きの knowledge は全615用例中、304例(49.4%)、後置修飾無しは311例(50.6%)と、ほぼ同じ割合であった。後置修飾のある場合と無い場合の単数フォームと不可算フォームの分布は表 2 の通りであった。

表 2 knowledge における後置修飾と a の共起関係

	[+後置修飾]	[-後置修飾]	計
[+ a]	78	0	78
[- a]	226	311	537
計	304	311	615

後置修飾と a の関係をカイ 2 乗検定により統計的に見てみると、やはり有意な関係がみられた ($\chi^2 (1, N = 615) = 91.39, p < .001$)。そして、表 2 の結果は、その両者の関係は、少なくともこのデータに関する限り、[+ a] の場合は例外なく [+ 後置修飾] であり (しかし、[+ 後置修飾] だからといって必ずしも [+ a] ではない)、[- 後置修飾] の場合は例外なく [- a] (しかし、[- a] だからといって必ずしも [- 後置修飾] ではない)、という関係に

あることを示している。

以上、前置修飾と後置修飾を2つの独立した要因としてそれぞれの a との関連性をみたが、次に前置修飾と後置修飾をセットにして a との関連性をみしてみる。表3は前置修飾と後置修飾の4つの組み合わせパターンごとに [+ a] と [- a] の頻度を示したものである。

表3 前置・後置修飾の組み合わせと a の関係

修飾の組み合わせ		パターン*	[+ a]	[- a]	計
前置修飾	後置修飾				
+	+	----- knowledge ~~~~~	52	100	152
-	+	----- knowledge ~~~~~	26	127	153
+	-	----- knowledge	0	116	116
-	-	----- knowledge	0	194	194
計			78	537	615

*点線 (-----) は前置修飾を、波線 (~~~~~) は後置修飾をそれぞれ表わす。

まず、後置修飾されている時に限定して、前置修飾の有無と a の使用の関連性をみると、前置修飾がある時のほうがない時よりも、[+ a] の頻度は52:26と2倍であり、また、[+ a] 対 [- a] の比率の点でも、前置修飾がある時は約1:2であるのに対し、ないときは約1:5と、前置修飾がある時のほうが [+ a] の割合が高いことがわかる。実際、後置修飾されている場合の前置修飾と a の関係をカイ2乗検定により統計的に見てみると、やはり有意な関係がみられた ($\chi^2(1, N = 615) = 11.87, p < .001$)。

次に、後置修飾がないときの前置修飾の a との共起関係をみると、(既に表2で後置修飾がないときは例外なく a は使われていないことをみたので、そこから推測できることであるが) 後置修飾がなければ前置修飾の有無にかかわらず a は使われていないことが確認できる。このことは、表1から前置修飾と a の間に観察された統計的に有意な関連性は、実は後置修飾があるときのみ限定されるものであること、および、前置修飾だけでは a が使われていないことを示唆している。

さて、「knowledge に a がついているときは必ず後置修飾が付いてたが、後置修飾がついているからといって a がついているとは限らない」という関係がみえてきたわけだが、そうになると、問題は、後置修飾があるときに a を使う時と使わない時の違いは何か、ということになる。そこで、次に後置修飾の中身を詳しくみていくことにする。

3.4 後置修飾の種類

表4は後置修飾されていた305例の後置修飾の種類別の内訳を示す。⁵

表4から of-phrase が後置修飾全体の7割以上 (221/315) を占めていること、および、さらに重要なこととして、of-phrase が全ての [+ a] の用例の9割近く (70/78) を占めていること、

表 4 後置修飾の種類と不定冠詞との共起関係

	of-phrase	of以外の前置詞句	関係代名詞	形容詞句	同格that節	to-不定詞	計
[+ a]	70	2	2	2	2	0	78
[- a]	151	37	13	12	8	6	227
計	221	39	15	14	10	6	305

そして of-phrase の場合、他の後置修飾と比べて [+ a] 対 [- a] の比は約 1 : 2 と最も [+ a] の割合が高いことがわかる。つまり、「a がついたときは必ず後置修飾がついていた」といったときの後置修飾の大部分（9割）は of-phrase であったということになる。そうすると、a と共起した of-phrase と a と共起しなかった of-phrase とでは何か違いがあるのだろうか。以下、knowledge に of-phrase が続いた場合に絞ってしばらく分析を進めることとする。⁶

3.5 of-phrase の分析

まず、[knowledge of X] のパターンにおいて X が knowledge の意味上の目的語（Xを知っていること : [Somebody knows X]）か主語（Xが知っていること : [X knows something/somebody]）かで、違いがあるかをみる。全 of-phrase の 221 例をこの点で分類すると表 5 のようになった。

表 5 [knowledge of X] における X の意味役割と a の共起関係

	意味上の目的語	意味上の主語	計
[+ a]	70	0	70
[- a]	148	3	151
計	218	3	221

X が knowledge の意味上の主語となる of-phrase はわずか 3 例しかなく（例：“I was very impressed with the caliber and the range of knowledge of people (at last week’s meeting),” said Councilwoman Leslie Anne Pontious.）、3 例とも knowledge は [- a] であった。この結果は、少なくともこのデータに関する限り、X が knowledge の意味上の目的語か主語かという要因は knowledge に a がつくか否かという問題に関与していないことを示す。

次に試みたのは、X にくる名詞（句）によって、ある X は [+ a] と共起し、ある X は [- a] と共起する、という可能性の検証であるが、残念ながら筆者には 221 の X を [+ a] になるグループと [- a] になるグループに分類できるような要因は発見することはできなかった。代わりに、その可能性に否定的なデータに遭遇した。つまり、[knowledge of X] のパターンにおいて、X が同じ名詞（句）の場合でさえ、knowledge に a がつくときも、つかないときもあるということがわかった。データ内に [knowledge of X] の X 部分に 2 度以上現れた名詞（句）

表6 [knowledge of X] で X 部分に 2 度以上現れた
名詞 (句) の a との共起関係

[knowledge of X] の X	[+ a]	[- a]	計
English	3	2	5
the game	4	4	8
the language	1	2	3
the law	1	1	2
the Middle East	1	1	2

は全部で5つあり、それらの [+ a]、[- a] の頻度は表6の通りであった。

表6が示すように、5つの目的語とも、aがつく場合とaがつかない場合のミックスであった。このような場合、[+ a] と [- a] はどのように使い分けられているのであろうか。以下、頻度の高かった knowledge of English と knowledge of the game の文脈を詳しくみる。

[knowledge of English] の分析

knowledge of English のコンテキストは以下の通りである。

単数フォーム

- [1] In the San Gabriel Valley in one of the many new developments east of downtown Los Angeles, Rorimer is not really an inner-city school. But it shares with many city schools the problems of educating a diverse group of students, many of whom are labeled “educationally disadvantaged”—they live in poverty and come to school with only a limited knowledge of English.
- [2] The district is spending an additional \$138,000 to increase the number of bilingual teachers and expand programs aimed at helping students with a limited knowledge of English. The extra spending boosts the district’s bilingual education budget from \$255,000 to \$393,000.
- [3] A high school diploma is not required to enroll. However, students should have the ability to handle college-level courses and a strong knowledge of English. Very few courses are taught in Spanish. A variety of courses in English as a second language are offered.

不可算フォーム

- [4] Diane Thomas, a spokeswoman for the district, said the drop among eighth-graders may be partly attributable to an influx in recent years of older students with limited knowledge of English.
- [5] Some coaches say communication problems with parents and even a handful of players still exist, though not to the same extent as several years ago. There are isolated cases of players with limited knowledge of English, such as Orange High wide receiver/cornerback Israel Avila, who recently moved here from Mexico.

興味深いのは [1] [2] [4] [5] はいずれも後置修飾が同じ of English であるというだけでなく、前置修飾も同じ limited で、しかも、limited knowledge of English が全体で with の目的語になっているという点で環境が酷似しているにもかかわらず、[1] [2] では単数フォームが使われており、[4] [5] では不可算フォームが使われている点である。一体このフォームの違いはどこからくるのか。[1] の with 句が副詞的用法であるのに対し、[2] [4] [5] の with 句は形容詞的用法という違いがあるが、副詞的用法か形容詞的用法の違いは単数フォームか不可算フォームかという違いとは重なっていないように見える。少なくとも形容詞的用法3例中、1つは単数フォーム、2つは不可算フォームと分かれおり、形容詞的用法ならこちらのフォームというような仮説は立たない。副詞的用法は1例しかないので、フォームとの関係で一般化はできない。そこで、全データ615例の中で knowledge が with 句の目的語として使われているケースを分析したところ、全部で62例あり、それらのフォームと用法の関係は以下のものであった。

表7 knowledge が with 句の目的語として使われた場合の with の用法と a の共起関係

後置修飾	[+ a]	[- a]	計
形容詞的用法	7	29	36
副詞的用法	12	14	26
計	19	43	62

割合の差はあるものの、どちらの用法の場合にも、単数フォームも不可算フォームも使われており、この結果から、「副詞的用法なら、単数フォーム」という仮説も立たないことがわかった。

結局、残念ながら、現時点の筆者には上記 [1]～[5] での a の使用、不使用を予測できるような説明は見つかっていない。

[knowledge of the game] の分析

knowledge of the game は単数フォーム、不可算フォームとしてそれぞれ4回づつ使われていた。それらのコンテキストは以下の通りである。

単数フォーム

- [6] While academics might be the chief difference in the player of the '90s, increased size, speed and a broader knowledge of the game also will be trademarks.
- [7] "He has a complete knowledge of the game," said senior outside hitter Angela Martin. "He knows every detail of every position.
- [8] But his speed, combined with a deep knowledge of the game garnered from endless weekends playing flag football, was blended with a ton of determination. And for two seasons, Fox has been an integral part of the Bandits as an offensive lineman.

- [9] “(Chad) has a great knowledge of the game for a young guy,” Cheek said. “He’s coachable, and he has probably as good a touch throwing the touch pass as I’ve ever seen on any level I’ve coached. He has a much better touch than Sonny Sixkiller. But he’s not close in arm strength.”

不可算フォーム

- [10] Comparisons are often made between the sexes in terms of competitiveness, knowledge of the game and basic athletic skills.
- [11] Say, Hey, He’s Coaching Children’s Baseball Youth fair :Willie Mays and friends pass along knowledge of the game to kids from 23 countries at UCLA this week.
- [12] Despite the Vikings’ troubles, Walker always has refrained from criticizing his coaches, but in the aftermath of his benching, it sounded as though he believes it’s time they take some of the blame for his decline. “They’re professional coaches, and I go out and do what they tell me to do,” Walker said. “Everyone else has to judge for themselves. If you have knowledge of the game, you can see what I’m doing. Everyone said, ‘Herschel is a back who can run the ball.’ I’m not doing that here.
- [13] “He has very good knowledge of the game and he thinks right,” Sneed said. “What he needs is experience. He needs physical maturity. A year or two at a (community college) and you’ll see a lot of improvement.”

ここでの単数フォームと不可算フォームをわける要因は何であろうか。まず、目がいくのは前置修飾である。[6] から [12] を見る限り、「前置修飾があれば単数フォーム、なければ不可算フォーム」ときれいに説明がつくが、[13] では前置修飾があっても不可算フォームが使われているため、単純に前置修飾の有無だけではどちらのフォームになるかはわからない。

次に考えられる可能性は、「この前置修飾なら単数フォームだが、この前置修飾なら不可算フォーム」といった式に、個々の前置修飾によって a がつかわれるかどうかが決まるという可能性である。具体的には「knowledge に broader、complete、deep、もしくは great がつけば、knowledge は単数フォームで使われ、very good がつけば、不可算フォームで使われる。」という作業仮説が立てられる。この点を検証するために knowledge of the game に限らず、全ての knowledge of ... の例から問題の前置修飾が現われる例を検索してみた。broader、deep の例は無かったが、complete は上記 [7] の他に次の [14] [15]、great は [9] の他に [16] [17]、very good は [13] の他に [18] [19] がそれぞれ 2 例ずつあった。

complete knowledge of ...

- [14] Wrote Edgar S. Brightman in “The Finding of God”: “We have granted freely, however, that final intellectual certainty is impossible . . . we can never attain complete knowledge of proof of the real.”
- [15] Wrote King in his paper “The Place of Reason and Experience in Finding God” : “We must grant freely, however, that final intellectual certainty about God is impossible . . . we can never gain complete knowledge or proof of the real.”

great knowledge of ...

- [16] Rowles said she expects this weekend's fare to consist primarily of standard--"jazz standards, not pop, rooted in be-bop. Dad has such a great knowledge of tunes that he has written me a beautiful library of tunes you just don't hear anymore, standards most people don't remember."
- [17] "This is real parachute journalism," Hess said. "There is not one person who has dropped in there who has great knowledge of the Middle East, who speaks Arabic or has a Ph.D. in Arab studies."
very good knowledge of ...
- [18] Bardwell said that, while ABC has larger production facilities than KCET, the American station was able to provide better access to American archival research than the Australians might have gotten on their own. For Australia's part of the bargain, he added: "We have a very good knowledge of Southeast Asia--it's our back yard, so to speak, we're very used to working there."
- [19] He added that he has become "disenchanted" with health-care administration program graduates. "They have very good knowledge of health care, but very few hands-on skills in business," he said.

結局、complete も great も very good も全て、単数フォームとも不可算フォームとも使われており、「complete や great がつけば単数フォーム、very good がつけば不可算フォーム」ということはいえないことがわかった。

[6] から [13] にもどって、単数フォームと不可算フォームを分ける要因として他に考えられる可能性としては、パラレリズムがある。そこで「X, Y, and Z のような並列関係にあるパターンで knowledge が X, Y, Z のどれかにあたる場合、他の 2 つの名詞 (句) のフォームと同じになる」という作業仮説を立ててデータをみたが、[6] では increased size, speed and a broader knowledge of the game と不可算フォームが 2 つ続いたあとに knowledge が単数フォームで使われており、[10] でも competitiveness, knowledge of the game and basic athletic skills と複数フォームとともに knowledge が不可算フォームで使われている。つまり、このパラレリズム仮説も否定された。

さらに別な可能性として、「knowledge が動詞の目的語になっている場合、動詞によって単数フォームか不可算フォームか分かれる」という作業仮説が考えられる。[6] から [13] では [7] [9] [12] [13] において knowledge が have (has) の目的語となっているが、[7] [9] では単数フォーム、[12] [13] では不可算フォームと分かれている。つまり、have の場合は単数、不可算のどちらのフォームとも共起し、どちらか一方だけということはいえない。knowledge of the game だけに限らず、knowledge が have の目的語になっている全ての例 (N=53) をみても、単数フォームが 17 例、不可算フォームが 36 例あり、同様の結論に至った。

なお、[11] では knowledge が pass along の目的語になっているが、pass along が knowledge を目的語にとる例は knowledge of the game 以外の全データをみてもこの一例のみ

のため、はたして pass along のときはいつも不可算フォームかどうかは手持ちのデータからは判明しない。

以上、knowledge に a がついている場合の最も典型的といえそうな [knowledge of X] のパターンをみてきたが、a の使用について決め手となるような要因は浮かび上がってはこなかった。

3.6 前置修飾とaの共起関係

前置修飾の関連性については、既に上で [knowledge of X] のパターンで limited, complete, great, very good のように単数フォームとも不可算フォームとも使われている前置修飾が存在することをみたが、他の前置修飾の中には、いつも a と共起する前置修飾や、いつも a と共起しない前置修飾のようなタイプの前置修飾グループが存在する可能性は残っている。しかし、本研究のようなコーパスデータは（本研究のように小規模なものでなくとも）、もう少しデータを集めれば、調査したサンプルからは1つも見つからなかった用例が出てくる可能性をいつも秘めているわけで、したがって、本研究のデータ内で、仮にある前置修飾がいつも [+ a] であったにしても、決して [- a] にはならないと結論づけられる性質のものではない。そこで、ここでの試みはあくまでも、この点に関する今後の本格的な調査へ向けての初歩的試みと位置付け分析を進めることとする。

まず、前置修飾のついた knowledge 全268例の中から、2回以上使われている前置修飾を選択し、少なくともこの限られたデータの中では、いつも単数フォームと使われていた前置修飾のグループ（単数グループ）と、いつも不可算フォームと使われていた前置修飾のグループ（不可算グループ）、そしてどちらのフォームとも使われた前置修飾のグループ（ミックスグループ）、の3つのグループに分類してみた。その結果がそれぞれ、表8～表10である（表では頻度の高い順に並べてある）。

表8は thorough が knowledge と5回使われ、その5回とも a が使われていたことを示すが、そのコンテキストを調べると、全て of-phrase を後置修飾としてとっていた。つまり、データ内では、thorough が使われたときは必ず a thorough knowledge of X の形で使われていたということになる。もっとも、5回程度のデータでは、不可算フォームの ϕ thorough knowledge of X が不可能なのかどうかはわからないわけで、今後の検証を待たなければならない。

表8 いつも [+ a] と使われていた前置修飾

	頻度
thorough	5
strong	2
vast	2

表9 いつも [- a] と使われていた前置修飾

	頻度
common	21
firsthand	13
public	10
general	7
scientific	6
advance	6
new&direct	5
full	5
little	5
detailed	3
human	3
prior	2
book	2
inside	2
medical	2
police	2
specialized	2
sufficient	2
technical	2
tremendous	2

表10 [+ a] と [- a] とともに使われていた前置修飾

	頻度	[- a]	[+ a]
extensive	7	6	1
limited	7	4	3
personal	5	4	1
rudimentary	5	3	2
basic	4	1	3
(very) good	4	2	2
great	4	2	2
working	4	1	3
complete	3	3	1
deep	3	1	2
intimate	3	2	1
shared	2	1	1
solid	2	1	1
special	2	1	1

表9では10回以上現れた前置修飾が3つあることが注目される。特に common は21回登場し、例外なく不可算フォームの ϕ common knowledge であった。そのうち、後置修飾がついていたのは1回だけ (of-phrase) で、あとの20回は後置修飾なしであった。コンテキストをさらに分析すると、common knowledge が be 動詞の補語になっているのが15例、become の補語になっているのが3例、と連結詞 (copula) の補語になっているパターンがほとんどであった。この結果から、common knowledge というつながりは使われている構文パターンにかなり明らかな傾向がみられるようである。さらに、数人のネイティブインフォーマントの話しでは common knowledge の場合、形容詞の common が名詞の knowledge を修飾しているという意識はなく、common knowledge がそれ全体で1語のような感じをもつという。firsthand や public にも同様のコメントをするネイティブインフォーマントも複数いたが、あくまでも非公式な雑談程度の話しなので、はっきりしたことは言えない。しかし、もし、仮にこのような意識が一般的であるとすれば、形容詞の本来の機能ともいえる、その形容詞が表わす属性を備えていないものを排除することによって、問題の属性を備えているものに絞って言及しようとする機能をその修飾語句が果たしているか否かという問題が knowledge に a をつけるか否かの問題と強くかかわってい

いる可能性があることになる。つまり、ただ単に修飾語句があるかないかの問題ではなく、書き手（もしくは話者）が修飾語句を限定的に捉えているか、非限定的に捉えているかの問題になる。この点は非常に重要な点であると思われるが、その調査には多数のネイティブインフォーマントの判断が必要となるので、今後の研究課題としたい。

3.7 knowledge が前置詞の目的語の場合の a との共起関係

最後に調べた可能性は knowledge が前置詞の目的語として使われている場合に、その前置詞と knowledge のフォームに何か関連性がないか、ということである。knowledge が前置詞の目的語として使われている用例は全データ615例中、287例あった。そのうち、knowledge が単数フォームで使われていたのが22例（7.7%）、不可算フォームで使われていたのが265例（92.3%）であった。これは、全データ615例で単数フォーム、不可算フォームがそれぞれ78例（12.7%）、537例（87.3%）であったと比較して、かなり a の使用率が低くなっていることを意味する。つまり、knowledge が前置詞の目的語になっているときは、そうでないときと比べて a を使う率が低くなっていた、ということである。その実態をもう少し詳しくみるために、knowledge を目的語にとった前置詞をリストアップし、その頻度、および [+ a] と [- a] の内訳をまとめたのが表11である。

表11から、単数フォームが使われた22例のうち、大部分の19例は with が占めていることがわかる。もし、with を特別扱いにして、とりあえずデータから外したとすると、不可算フォームが222例（98.7%）になり、knowledge が前置詞の目的語として使われている場合に、knowledge

表11 knowledge を目的語にとった前置詞と

knowledge を目的語にとった前置詞	前置詞の頻度	knowledge のフォーム	
		[+ a]	[- a]
after	1	0	1
as	2	1	1
beyond	1	0	1
by	1	0	1
for	20	0	20
from	7	0	7
in	8	0	8
into	1	0	1
of	142	0	142
on	20	1	19
to	13	1	12
with	62	19	43
without	9	0	9
計	287	22	265

に a が使われない傾向は一層強くなる。中でも目につくのは of で、142回 knowledge を目的語にとっているが、1 回も knowledge に a が使われていない。因に、この142例中、knowledge に後置修飾がついていたものは34例含まれていた⁷。つまり、後置修飾の有無にかかわらず、一貫して [- a] ということになる。もちろん、もっとデータを集めれば、a が使われているケースが出てくる可能性は十分あるが、表11の結果は、少なくとも [of + knowledge] のパターンでは knowledge が不可算フォームになる傾向が強いこと、そしてさらには、with を除けば、of に限らずどんな前置詞でも、同様の傾向がある可能性を示しているように思われる。

以上の結果を踏まえて、前置修飾の有無、後置修飾の有無、および knowledge が前置詞の目的語になっているか否か、という3つの要因で、knowledge の使用環境を定義し、それぞれの環境における a の使用率をまとめたものが、表12である。

表12 それぞれの環境におけるaの使用率(%)

修飾の組み合わせ		knowledgeが前置詞の目的語になって		knowledgeが前置詞の目的語か否か考慮しない場合
前置修飾	後置修飾	いる場合	いない場合	
+	+	28.6	36.9	34.2
-	+	12.9	19.8	17.0
+	-	0	0	0
-	-	0	0	0

最も a の使用率が高かった knowledge の環境は [+ 前置修飾]、[+ 後置修飾]、[前置詞の目的語になっていない場合] の組み合わせで、36.9%であった。つまり、この環境では3回に1回は単数フォームであったことを意味する。この36.9%という率は、全データ615例に占める単数フォームの割合が12.7%であったことを思い起こすと（セクション3.1参照）、その約3倍ということになり、かなり高い率といえよう。

[- 前置修飾]、[+ 後置修飾] の環境においても、[前置詞の目的語になっていない場合] が [前置詞の目的語になっている場合] より a の使用率は高く、19.8%と、5回に1回の割合で単数フォームが使われていたことがわかった。

以上の結果をもとに、上述の Quirk et. al の観察を吟味してみよう。彼等の観察を下に再度引用する。

the noun is premodified and/or postmodified ; and, generally speaking, the greater the amount of modification, the greater the acceptability of a/an.

ここで、彼等は the noun is premodified and/or postmodified と前置修飾と後置修飾を and/or でつないでいて、両者が単独でも a と共起する可能性を示している。実際、彼等の例文の Mavis had a good education. がこの点を例証しているが、少なくとも本研究の限られたデータだけを見る限り、knowledge という名詞については、前置修飾だけで a と共起した例は 1

つもなかった。また、彼等の説明の後半部分 (the greater the amount of modification, the greater the acceptability of *a/an*.) については、もし *a* の容認度を *a* 使用頻度で見たとすると、まず、前置修飾も後置修飾もあるときのほうが *a* 使用頻度が最高で、どちらの修飾もないときに *a* 使用頻度が最低、という点、および後置修飾があるとき前置修飾があるほうがないときより *a* 使用頻度が高いという点では確かに修飾量が多ければ *a* の頻度が高くなる。しかし、後置修飾がないときには、前置修飾があってもなくても頻度に差はなく、その意味では、修飾量が多くなっても *a* の頻度が高くなるわけではなかった。この意味では後置修飾の方が *a* 使用について前置修飾より強い関連性をもつようにみえる。

勿論、本研究のサンプルの外では、後置修飾がなくても (前置修飾だけでも) *a* と共起している knowledge の例がある可能性は十分ある。しかし、本研究の結果が示している前置修飾に対する後置修飾の優位性は、少なくとも今後検証する価値のある仮説になりうると思われる。その際、education と knowledge という名詞の違いも重要な点になることは言うまでもない。

4 結語

本研究は、不可算フォームで使われる場合と単数フォームで使われる場合とで明確な意味の差異が (少なくとも筆者には) みられず、したがって、どういうときに *a* をつけるべきなのかよくわからない名詞の事例研究として、knowledge という名詞を取り上げ、小規模なコーパスデータを基に、ネイティブスピーカーが実際にどういうときに knowledge に *a* を使っているのかを検証したものである。

わかった主な点を、今後より多くの用例に照らし合わせて検証すべき作業仮説としてあえて一般化した形でまとめると次のようになる。

- 後置修飾は knowledge に *a* がつく必要条件であるが、十分条件ではない。(knowledge に後置修飾がなければ、*a* がつく可能性はないが、後置修飾がついているからといって必ず *a* がつくとは限らない。)
- 前置修飾は knowledge に *a* がつく必要条件でも十分条件でもないが、knowledge に後置修飾がついている時には前置修飾がある時のほうがない時より knowledge に *a* がつく可能性が高い。
- knowledge に少なくとも後置修飾がついている場合、knowledge が前置詞の目的語になっていない時のほうが、なっている時よりも knowledge に *a* のつく可能性が高い。

以上の帰結として、調べた要因の組み合わせの中では、knowledge が [+ 前置修飾]、[+ 後置修飾]、[前置詞の目的語になっていない場合] の環境で使われるとき、最も *a* の使用率が高いことが判明した。しかし、その環境でさえも、*a* がつく確率は $1/3$ で、*a* と共起したその $1/3$ の環境が *a* と共起しなかった残りの $2/3$ の環境とどう違うのか、という肝心の問題は未解決のままである。

参照文献

- Berry, R. (1993). *Collins COBUILD English Guides 3: Articles*. London: HarperCollins.
- Hiki, M. (1996). A study on so-called Optional article usage: when is it that it doesn't really matter which article to use? *Studies in Social Sciences and Humanities*, 42, 29-57.
- Quirk, R. S., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Sinclair, J. ed. (1990). *Collins COBUILD English Grammar* London: Collins Publishers

注

- この修飾量と容認度の比例関係について、彼等は次の例文を提示している。

She played the oboe with sensitivity.
She played the oboe with *a sensitivity.
She played the oboe with (a) charming sensitivity.
She played the oboe with a sensitivity that delighted the critics.
- DIALOG OnDisc, Los Angeles Times, January-June, 1990, Times Mirror Company を使用した。
- a 以外の限定詞つきの knowledge の用例を除外したのは、the knowledge, my knowledge のような場合、筆者には不可算の ϕ knowledge に the や my がついたものか、可算・単数の a knowledge に the や my がついたものか、判断できないためである。
- 除外した問題の用例は次の通り。

“From my days as a student onward I have been driven by a great knowledge, to know, to get to the bottom of things,” Pellegrini says. “From my more limited point of view and much more humble resources, I can identify with Bertrand Russell, who said in his last days, so to speak, that there had been three great motive powers in his own life. One was love. Just full-throated earthbound love, none of that business up there in the clouds. The other was the desire for knowledge. He wanted to go to the ultimate reality of things, and that was really a driving passion that he never let go of. The third was a compelling, continuing desire to alleviate human suffering. Russell put it all together toward the end of his life. He said, and I am summarizing here, ‘Remember the human family, and forget everything else.’ ”
- 後置修飾の種類別ごとに1例を挙げる。

[of-phrase]: And he will need a knowledge of international economics, with his leaders expecting more materially from its foreign friends.

[of 以外の前置詞句]: Yes, critics also need to have academic knowledge about their field and to have looked at a lot of art.

[関係代名詞]: At the opposite end of the pay scale, many of the more advanced aerospace

scientists and engineers have specialized knowledge that is not in great demand outside their field.

[形容詞句] : Native-born Californians, we have been looking at movies all our lives, but with a knowledge different than that of people who saw those same movies in faraway theaters.

[同格 that 節] : Throughout the process, knowledge that the research was going on was kept to a handful of people.

[to-不定詞] : Like the ex-burglars, the ex-S&L players have knowledge to share.

6 of-phrase 以外の後置修飾についても、検討すべきであるが、より詳しい分析をするに十分なデータ数がないため、今後の研究課題としたい。

7 knowledge が前置詞の目的語として使われている時に、不可算フォームが使われた全265例をみると、[+ 後置修飾]が89例 (33.6%)、[- 後置修飾]が176例 (66.4%) と 1 : 2 の割合であった。